

巻き戻り令息の脱・悪役計画3

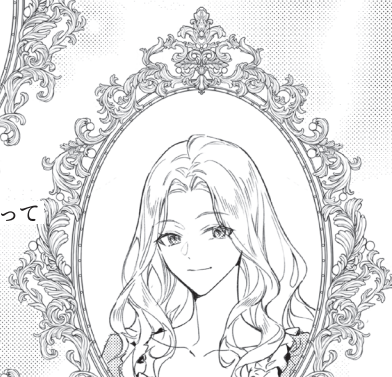
Characters

Makimodori reisoku no
datsu-akuyaku
keikaku



アンドレア・ロッシ

フェランドの亡き兄。
素行が悪かったことで有名。
オルフェオが生まれる前、酒に酔って
転落死をしたと言われている。



エウジェニア・ロッシ

オルフェオの実母で、
フェランドの前妻。
オルフェオが子供の頃に他界した。
儂げな美貌の持ち主。



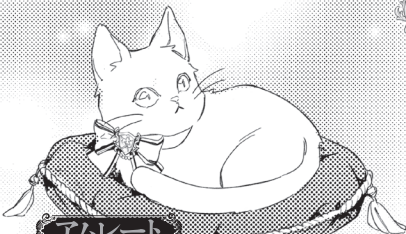
セルジオ・ブルーノ

ロッシ伯爵家本邸の執事で、
アレッシオの父親。
完璧執事だが、たまにお茶目な
一面が垣間見える。



フェランド・ロッシ

現ロッシ伯爵。優れた容姿と
社交的な性格から、誰からも
慕われる人気者だったが、
今は落ちぶれて見る影もない。

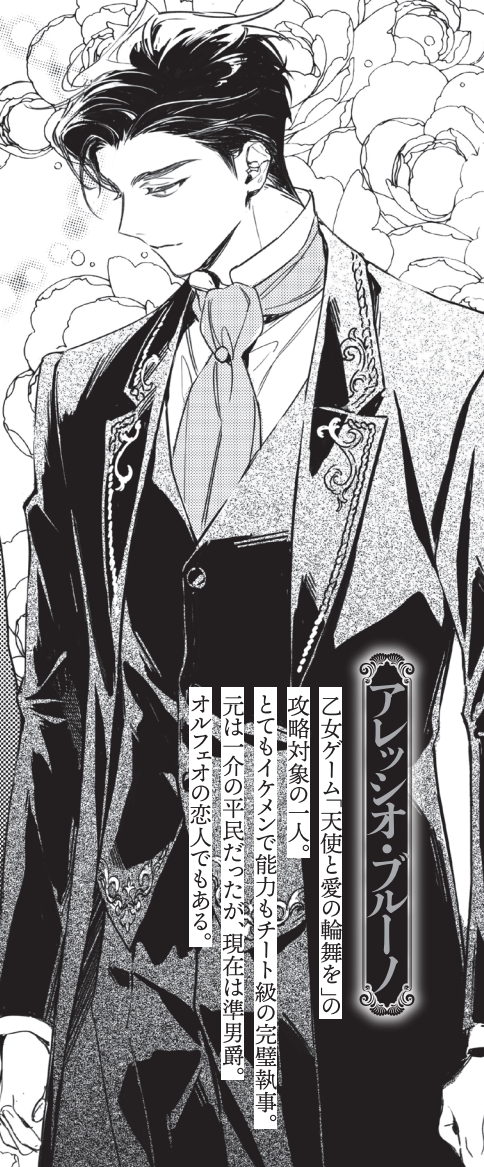


アムレット

オルフェオと契約した謎の白い子猫。
本性は狡猾な悪魔だが.....?

オルフェオ・ロッシ

ロッシ伯爵家の嫡男で、乙女ゲーム
「天使と愛の輪舞を」の悪役令息。
フェランドに代わり、伯爵代理として
ロッシ伯爵領を治めはじめ。
恋人となったアレッシオのかつよさに、
今日も悶えている。



アレッシオ・ブルーノ

乙女ゲーム「天使と愛の輪舞を」の
攻略対象の一人。
とてもイケメンで能力もチート級の完璧執事。
元は一介の平民だったが、現在は準男爵。
オルフェオの恋人でもある。

目次

巻き戻り令息の脱・悪役計画 3

番外編 願いは何？

巻き戻り令息の脱・悪役計画 3

プロローグ

『げ、俺の顔が可愛い』

それが今の俺になつてから、最初に口走った言葉だった。

一番大事な復活初日に締まらない発言をしたばかりに、それ以降も全然締まらない奴になつてしまった気がする。

何事も最初が肝心なんだぞと、当時の俺に優しく指摘してあげなくなるが、無意識に口から出てしまったものは仕方がない。

——あの日、俺は思い出した。

俺の名はオルフェオ・ロツソ。

ロツソ伯爵家の長男として生まれ、どうしようもないクズに成長し、牢の中に放り込まれて生涯を終えた。

しかし命の灯が消えかけたその直前、悪魔と称する白い子猫と契約を交わしたために、気付くと俺は九歳の頃に巻き戻っていたのだ。

『あの日から今日までずっと間違えてきた、さまざまなことをやり直してみたい』

どうせ無理だよねと思っていた願いが本当に叶ってしまった時、人は喜ぶより先に戸惑うものがある。

おまけに代償が命ときは、素直にわーいやったーと手を叩けるわけがない。

これだけならまだシンプルなんだが、ややこしい話になった。

何故か自分の中に、まったく違う世界の人間の記憶があるではないか。

別世界の『俺』はゲーム会社に勤めており、『天使と愛の輪舞』という乙女ゲームの制作に携わっていた。

そのゲームの中の、全ルートにおける悪役の名が『オルフェオ・ロツソ』だったのである。

どうも子猫がお遊びで、その記憶を『攻略本』としてうまく使えと、俺の中に植え付けたいらしい。ところが当時の俺の精神が弱り切っていたせいで、本来なら別々に存在するはずだった記憶に、人格が完全に吞まれてしまったのだ。

予想外の事態に頭を抱える子猫。ドンマイ。

おかげで俺は、自分が父フェランドの思惑で『悪役』に追い込まれた事実を知り、本来なら敵対するはずの攻略対象を全員味方につけることができた。

頼もしく成長した義弟おとうとのジルベルト。

仲良し友達のルドヴィク。

できる側近のラウルとニコラ。

そして俺の側近にして執事のアレッシオ。

彼らの協力によって、悪意なき問題児だったヒロインにはさつさと表舞台から降りてもらい、フェランダの評判も地べたに叩き落とした。

奴はもうご立派な領主様ではなく、俺も怠惰で無能なお坊ちゃまではない。俺達の世間の評判は完全に裏返り、そして今、俺はロツソ家の新たなあるじとして、領地を目指す馬車に揺られている。

せっかくお祖父様が先々のことを予見し、いざれ訪れる嵐の対策を取ってくれていたのに、フェランダの奴がそれをめちゃくちゃにしていやがった。

このままではゲーム通り、とてつもない被害が出てしまう。

頭も体力も時間もフルに使い、少しでも領民の被害を抑えることが、巻き戻った俺の生涯最後にして最大の仕事になるだろう。

それから、アレッシオ。

絶対叶わないと思っていたのに、まさかあいつとこ……………になれる日が来るとは思わなかった。練習してやっと言えるようになっていたはずが、何ゆえ退化しているのだ？

これはのちのち改善に取り組むとして、問題は彼との約束である。

昔交わした、あれだよ。「結婚でもしますか」というあれ。

自棄になった子供に、二度とバカな真似すんなよって、大人として釘を刺すセリフ——なんだけど。

よくよく思い返したら、こうも言われているんだよね？

『成人したら、あなたをくれますか』

結局それは子猫に言われて、リミット直前の四月一日に延期してもらうことになったんだが。

……つまりそれって、俺をアレッシオにあげるといふ、そーゆー……………？

え!? そーゆーこと!?

俺、アレッシオとそんな約束してたの!?

待て俺、冷静に考えてみる。当時の俺はアホなガキだった。そして今の俺はこ……………あ、終わった。

ひとまず頭をリセットし、結婚の意味について考えてみよう。

この国に同性婚はない。だからアレッシオも口約束という言い方をしていた。

他国には結婚式を行わなければ婚姻が成立しない国もあれど、アルティスタ王国では署名をして貴族院に届けるだけで成立する。

アクセサリーの交換もない。式を挙げなければ、実に地味なものだ。

一番重要なのは伴侶になるという事実であり、すなわちそれはベッドがひとつで枕が二つ——

リセットしたらふりだしに戻った、だと……………!?

「閣下。ご気分でも？」

おっと、眉間に指を当てていたらアレッシオに心配されてしまった。

危ない危ない。百面相するところだったぜ。

「気分は問題ないのだが。道の悪さに少々、な」

「確かに。舗装された王都の道に慣れておりますと、この道には閉口いたしますね」
特に変には思われなかったみたいで、彼は普通に苦笑した。

俺はこっそり胸を撫なで下ろす。——今は余計なことに頭を使うな。
窓の外に視線を移し、ゆるみかけていた気を引き締めた。

第一章 願いを継ぐ者

ロツソ伯爵領は遠い。

地図上ではそれほど遠くないように見えても、実際は蛇行している道があり、おまけに馬車という乗り物自体がそんなにスピードを出せない。

曲がりくねっているのは大抵、大昔からそのままの旧道だ。攻め込まれにくいよう、不便な道が望ましいとされていた時代の名残なごり。

アルテイスタという国に統一され、時代が変わっても、地方に行くほど道は改善されていない場所が多い。

三月末に王都を発たち、俺はしばらくイレーネやシルヴィアと一緒に当主用の馬車に乗っていたが、途中から側近用の馬車に移った。道のりは長く、今後について意見を出し合い、到着までの時間を有効に使いたいからだ。

今は俺の隣にニコラ、正面にアレッシオ、アレッシオの隣にラウルが座っている。アレッシオが隣にいと俺が平常心を保ちにくくなるから、自然とこの配置になった。

彼らと話しながら時間を消化していると、十二歳の頃と比べて視野が広がったのか、周りの物事に対する見え方が変わっているのに気付く。

「王都から遠ざかるほどに寂れていくな」

良く言えば自然のまま、悪く言えばろくに手を入れていない土地を眺め、俺はぼそりと漏らした。ロツソ伯爵領と王都の間には、他の貴族の領地が二つ入っている。

とにかく広大な高位貴族の領地と、ロツソ伯爵領に接した小さな下位貴族の領地だ。

王都に接している場所は栄え、そこまでは道の状態も民の暮らしぶりも良かった。

ところがそこを過ぎると、領主の能力と関心の差があからさまに出る。

「この領主はどうも、よい領主ではありませんね。同じ領内でこうも格差があるとすれば、これほどの土地を治める能力があるとは言い難いでしょう」

「この領主はダメです」

アレッシオが遠回しな言い方をするのに対し、ラウルは一刀両断である。

「閣下に敵対する者ではないと認識しておりますが」

「そうですね。とりあえず敵対者ではないので、害はありません。ただ、王都の方向ばかり見て、端を全然見ていないからこの状態なんです」

皮肉っぽいセリフはラウルの十八番だが、これは嫌いな奴を語る時の口調だな。

「流行り物が好きな領主なので、アランツォーネには協力的ですよ。こちらからは全然仲良くしたいとは思いませんけど。僕としては、ロツソ手前の小領主のほうが気になります」

アレッシオは王都のことなら表も裏も詳しい。けれどそこ以外の土地については、ラウルに軍配が上がる。

ラウルの気になる小領主は、かつてお祖父様に仕えていた老人で、偏屈で無口という話だった。

なのに何故か商会の人間には、かなり早い段階から協力的だったらしい。

「ダメ元で商会の拠点を置きたいと頼んだら快諾されて、担当者が面食らったっていう話もあるんですよね。多くを語らない人らしくて、理由はわからないんです」

そこは道が不便で、領の産物をよそに運んで売るのにも難儀し、全体的に豊かではない。だから道を改善したいと思ってもその資金がなく、商会の申し出は渡りに船だったようだ。

「でも決め手になったのは、アランツォーネがあなたの臣下と名乗ったことだったんです。ロツソ領におけるあなたの評判が改善される前の話ですよ。あなたが元主君の孫だからかと、当初はそう思っていたんですが」

しかしのちに、別の理由があるのではないかと引っかかるようになったという。

「ふむ。前回は素通りしてしまったから、私はその者に会ったことはないんだ」

「今回、こちらの館に滞在する予定ですけど、構いませんか？」

「ああ、もちろんだ」

寂れた道から一転、小領主の領地に入ってから快適になった。商会の手が入り、そこからロツソ伯爵領までの主要道路が整備されたからだ。

ラウルの家は骨の髄まで商売人を公言していても、貴族であることに変わりはない。そしてほとんどの貴族は、他家の者に自領をいじられることに抵抗感を覚えるはずなのだ。

「なるほど。これは気になる」

そしてそこで俺達は、予想だにしなかった光景を目にすることになった。

初対面の相手なので、一応は格式を気にしておかなければいけない。

俺は側近用の馬車から当主用の馬車に戻り、改めて小領主の館に向かったのだが……何やら館の周りに、ずらりと人だかりがある。

入り口前には領主夫妻らしき人物と使用人一同が並んでおり、それ以外の人々はなんとなく近所の人っぽい。

とにかくありったけの人を集めて歓迎の準備をした、という感じだ。

戸惑いつつ馬車から降りて、白髪頭のしらが小領主の前に立つと——彼はいきなり泣き崩れた。

ちよっ、俺なんもやってないけど!?

しかも小領主の爺さんだけじゃなく、奥さんまで目が潤んでいるではないか。

内心ビビって硬直している俺の前で、爺さんは地面に膝を突いたまま、シワシワだが働きの者な感じのする両手で俺の片手を取る。

そして、手の甲に額を押し当てた。

これは臣下が主君への忠誠を示す、古い作法のひとつだった。

「生き写しで、いらっしやる……」

「お祖父様にか?」

「いいえ」

爺さんはしゃくりあげながら、小さな声を絞り出した。

「アンドレア様の、御代を……心待ちに、しておりました……」

「……そうか」

俺はなんとも言えない気持ちになり、そう答えるしかなかった。



大所帯の俺達だったが、小領主の爺さんは側近や使用人も全員泊まれるように手配してくれていた。

小領主の館にしては広く、部屋数も多い。土地に余裕があるからというだけでなく、いざという時に民の避難所として機能するよう、随分前に増築していたらしい。

食堂で心づくしの晩餐ばんさんを楽しむと、頃合いを見てイレーネが立ち上がった。

「あとは殿方のお話がございますでしょう。さ、シシィ。一緒にお部屋に行きましょうね」

「ん……」

領主夫人もお腹いっぱい船を漕いでいるシルヴィアに微笑みかけ、イレーネと一緒に連れていってくれた。

食堂には俺と三人の側近、そして騎士隊長のジェレミアと副隊長のみが残る。

小領主の爺さんは妻の姿が見えなくなると、俺の目を見て姿勢を正した。

「今一度、お詫び申し上げます。とんだ醜態を晒してしまいました」

「いや、構わんよ。それよりも、事情は話してくれるな？」

「はっ……」

彼はこれまでずっと口にしなかったであろうことを、順序立ててきびきびと話してくれた。

——お祖父様の長男であるアンドレアが亡くなったあと、その間を置かずにお祖父様やお祖母様までが亡くなって、いくらなんでもおかしいと感じる者はいたらしい。

けれど声を上げることはできなかった。フェランドの奴が何かをしたという証拠はなく、ただの不運として片付けられてしまえば、それがすべてなのだ。

何よりこの爺さんは『御代』という言葉を使った。これは通常、王に対して使われる言葉だ。

アルティスタという国ができる前までは、それぞれの土地を治める人物が正しく王であり、何百年経った今でも地方に行くほどその感覚が残っている。

生涯ただの一度も生まれ育った土地から出ることのない人々にとって、領主の決めた法がすべてであり、領主より上のものは存在しない。

王となったフェランドに逆らうこと以上に、民にとって恐ろしいことはなかった。

「それでも声を上げようとした者は、姿を消しました」

だろうなと思っけていても、改めて聞くと不愉快な話だ。

地方の小物ごときがいくら騒ごうと、その声はどこにも届かない。そして奴の本性を知らず、見せかけの姿を信じている幸せな連中だけが残った。

あるいは、口をつぐんだ者が生き残った。多分ほかにも、そういう者がどこかにいるんだろう。ちなみに小領主の爺さんは、俺がフェランドの息子ということで昔は慎重になっていたそうだ。

ところがその息子が奴に反逆し始めたこと知り、奴とは違うのだとはつきりわかったという。

「伝え聞くところのご気性やご容姿からも、どちらかといえばアンドレア様に似ておいでなのではないか、と。その可能性がずっと頭から離れず、ひと目でよいかからお会いしたいと、切に願っておりました」

「私の容姿は、お祖父様によく似ていると言われるんだが」

「大旦那様にも似ておられます。されどわたくしの記憶では、あなた様はアンドレア様に書き写しでございます。あの御方は大旦那様よりもやや線が細く、お顔立ちも整っておいででした。とても活動的で、馬は好きでいらしたのに、乗馬が不得手でいらして……」

あ、俺だ。

好きと得意は別だよねっという好事例だね。え、違っって？

なんかうちのみんな、そのエピソードだけで俺を見ながら「ああ……」みたいな納得顔になるのはなんですか。

「それから、大旦那様以上に頑固な御方でした。そのためによく大旦那様と衝突されていたのですが、大旦那様は『何故あやつはいつもああなのだ』などと愚痴を漏らされつつも、お顔はどこかお楽しみのご様子で……」

……ああ。それ、なんかわかる。

『俺』の世界での記憶に、こんながあるんだ。

同僚達が険悪な言い争いをしていると思ったら、最後に笑えるオチがつく。そいつらは罵り合っているようで、実は呼吸の合った冗談をぶつけ合い、じゃれているだけだった。

だけでも第三者がそこにいて、オチを聞かずにその場を離れてしまったら、こいつら仲悪いの
かって誤解されるよな？ だから『俺』はいつも、「おまえら勘違いされるからほどほどにしとけ
よー」みたいに、軽い調子で止めていたんだ。

お祖父様とアンドレアも、ひよっとしたらそういう場面をフェランドに利用されたのかもしれない。

あいつは昔、ジルベルトが庭の池に落ちた時、俺が義弟を池に追いやったんだろうと決めつけた。
ジルベルトを止めようとした時の、俺の『大声だけ』が奴のもとまで届いていたから。

「伯父上は素行がよくないと耳にしていたんだが、それは？」

「実際は生真面目で、頑固で、働きすぎの、奥手な朴念仁ぼくねんじんでいらしたと記憶しております。普段は
泰然としておられますのに、意中のご婦人と目を合わせるのにもお得意ではなく……」

俺!! 俺の血!!

特に後半、なんかアレッシオの視線を感じる……!!

「アンドレア様をよく知る者は、そのような噂など誰も信じてはおりませんでした。適当な噂を
流す輩やからはどこにでもいる、放っておくと大旦那様からもアンドレア様からも命じられましたもの
よ……」

「お二人は、あまり深刻には受け止めておられなかったんだな」

「仰せの通りでございます。ご命令とはいえ、放置したことが今は悔やまれてなりません。王都の
方々だけでなく、気付けばロッソ領の民も、大半の者が噂を信じ込んでいる始末」

爺さんは悔しげに目を潤ませた。そんなにも事実と異なるのなら、そりゃあ無念だったろうな。
ならひよっとして、これもか。

「伯父上は、泥酔して階段から転落……というのは」

「有り得ませぬな」

きっぱりと断言した。

「下戸げこだったのです」

「えっ」

「アンドレア様は、酒を受け付けぬお身体でございました。飲めぬ男は恥という風潮がございまし
たもので、恥ずかしいから誰にも話すなどお命じになり、その事実を秘しておられたのです。これ
を知る者はごく一部、大旦那様やアンドレア様のお傍に仕える者、あとはお料理をお出する者だ
けであったかと存じます」

感情論ではない、完璧な根拠だった。

この衝撃の事実には、いつも冷静な俺の側近達でさえ動揺を隠しきれていない。無意味に布巾を
触ったり、口元に手をやったりと落ち着かない様子だ。

俺もまさか、こんなところでこんな決定的な話が出てくると思わなかったよ。

ふと頭に浮かんだのは、あの性格の悪い料理長。尋ねてみると、爺さんはそいつのことを覚えていた。

「あの者は当時、料理人ではなかったと記憶しております。ですので、大旦那様ご一家に料理をお出する立場にはございませんでした」

あいつ、料理人ですらなかつたのか。

さらに聞いたところによると、フェランドが爵位を継いだ直後から古い顔ぶれがどんどん排除されていき、その中には厨房の人間も入っていたという。

権力者が交代する時、よくある現象だ。ただそういうのは大抵、先代の頃にのさばっていた悪臣を一掃するパターンか、逆に良臣を遠ざけるパターンのどちらかになる。

フェランドの場合は明らかに後者なんだが、それは今だから確信を持って言えることだ。

あの料理長は、先代の料理人達がみんな追い出されたあとに雇い入れられたようだ。そしてフェランドに媚びへつらって厨房のヌシになり、その後も自分の気に入らない新人をイジって辞めさせている。

「ちなみに、酒に関する事実を知る者は」

「わたくしの知る限り、わたくしが最後までございますな。アンドレア様にお仕えしていたメイドと、当時の料理長に関しては、職を辞したあとの行方が知れませぬ。その他の者はすべて、老齢で他界しておりますゆえ」

お——おいおいおい！

それ、なんか後ろ暗いことがあつて逃げたか、余計なことを口にしかけて消されてねえ!?

小領主の爺さんから話を聞いたあと、俺のために用意された客室に側近達を集めた。

今は三人とも衝撃が抜けたというか、一周回って冷静になったような顔をしている。俺もそんな顔をしていそうだ。

「現実問題として、あの方のお話だけでフェランドを訴えることは不可能だったのでしようね。さぞ口惜しかったことと想像がつかます」

そう言ったのはアレッシオだ。

かつてフェランドをまともな主人と想っていた記憶が、彼の中で黒歴史と化していることは想像に難くない。

「どれも証拠がないって一蹴されて終わりでしょうね。で、人知れず消されると」顔をしかめながら言ったのはラウルだ。これには全員が重々しく頷いた。

それにしてもあの男の周り、いったいどれだけの人が消えたんだろう。行方不明者も入れれば、相当な数になるんじゃないのか？

自分の身内にそんなのがいたんだと思うと、今さらながらゾツとする。

「……アンドレア様がお亡くなりになった時の死因は、『泥酔により階段から転落』ということになつているのですよね？」

首を傾げながら、不可解そうに確認してきたのはニコラだ。

「そうだが？」

「フェランドによる謀殺だったとしたら、何故その方法にしたのでしょうか？ 飲めない方でいらしたのなら、不審に思われてしまうと考えなかったのでしょうか？」

「それは……あの男は、その事実を知らなかったんじゃないのか？」

口にして、ハツとした。

フェランドは知らなかったのか？ どうして？

もしそれを知っていたと仮定すれば、ニコラが言ったように、その方法を使うのは避けるだろう。知らなかったとすれば……アンドレアが己の恥を打ち明けた『ごく一部の人間』の中に、フェランドが入っていないことになる。

「兄として、恥ずかしいことを弟に知られたくなかった……？」

兄のプライドを保つために、弟には教えなかったのか？

「あるいは、弟君を信用されていなかったのかもしれないね」

アレッシオの言葉がストンと腑に落ちる。

お祖父様やお祖母様が、長男よりも次男のフェランドのほうを可愛がり、目をかけていたという話はよく耳にした。それはフェランドが広めたものではなく、当時を知る使用人の口から広まった話だ。

実際にあいつはお祖父様達の前で、良い息子と映るようにふるまっていたはず。

だが、兄のアンドレアと仲が良かったという話はまったく聞かない。

ロッソの家の兄弟について人々が語るのには、兄アンドレアの素行が悪く高圧的で、フェランドが優秀で良い弟という話ばかり。——どこかで聞いた話だな。

素行が悪く高圧的な俺と、優秀で良い義弟のジルベルト。かつてフェランドによって作り上げられた、俺達兄弟の関係。

だとしたら当時のアンドレアの状況が、俺には痛いほど想像がつく。

彼はきつと、自分の弟のそういうところ、に勘付いて、己の弱みに関することは決して打ち明けたかったのだ。

「となると、フェランドは知らずにそれを決行し、あとからおかしいと言う者が出てきて、初めて兄が下戸である事実を知った……ということか」

「おそらく、そのような流れだったのではないかと」

ならば、自分の兄貴の用心深さを舐めていたのが敗因だな。

フェランドはやや詰めが甘いというか、自分を過信して失敗している点が目立つ。それをリカバリするために、ポコポコ行方不明者が出ている感じだ。

「これほどのことを、遊びでやれる感覚がまったく理解できん」

重苦しい空気と一緒に吐き出すと、皆は深く頷いた。

改めて俺に忠誠を誓った小領主の夫妻に、またいつか立ち寄ると約束をし、再びロッソ領へ向けて出発した。

十二歳の頃、身軽な少人数で王都に向かった時は、片道で十日もかかった。今回は遙かに大人数の旅程だったにもかかわらず、同じ日数で到着の見込みになっている。

この数年、地道に商会の拠点を増やし、それに伴う道路工事をこまめに進めてきた。こうして実際に通ってみて、速さと快適さが段違いに上がったのを実感する。

あの頃の俺だったら、この仰々しい一行の中心にいることにビビっていたかもしれない。でも今は不思議と、これが自然であるような馴染んだ感覚がある。

馬を休ませるための休憩時間、俺は馬車を降りて外の空気を吸うことにした。側近と護衛の騎士を伴い、小高い丘から領地を見渡す。

ここはもうとつくに、ロッソ伯爵領の中だ。

向こうに町がある。俺が一度も行ったことのない町だ。考えてみれば俺は王都の観光云々以前に、自分の生まれ育った領地すらろくに知らないのだ。

知っているのは、本邸の真ん前にあるテネレッツアの町だけで、そこでさえ限られた場所にしか足を運んでいない。

紙の上でしか認識していなかった情報が、現実として目の前に迫ってくる。

あれがロッソ領だ。粒のようにぎっしりつまった家の中ひとつひとつに、人が住んでいる。

町の周辺には畑があり、農家らしきものがポツポツと散らばり、さらに向こうには山々が青く連

なっていた。

ここが俺の生まれた場所。俺の育った場所なのだ。

あそこに俺の民がいる。ここに俺の『国』がある。

瞼を閉じ、大きく息を吸い込むと、この身に流れる血がそう叫んでいる気がした。

当主の馬車に側近の馬車が続き、さらに使用人の馬車、大荷物を積んだ荷馬車——どれかひとつだけでも目立つというのに、ダメ押しでロッソの紋章を掲げた騎士が二十騎だ。

ギョツとして脇に避ける領民達に、脅かしてごめんよと胸中で詫びつつも、俺達は堂々と門を通り過ぎる。

王都邸よりもずっと庭が広く、建物も大きい。

懐かしい、四年ぶりの本邸だ。

馬車が停まり、従僕が扉を開け、俺とイレーネとシルヴィアが順番に降りる。

玄関の大扉の前に立ち、最初に出迎えてくれたのは本邸の執事のブルーノだった。

「久しいな。今戻った」

ブルーノは俺の姿を見開き、じわりと涙を滲ませて「お帰りなさいませ」と微笑んだ。

久しぶりで懐かしいのに、不思議とつい最近まで会っていたような感じもするな。

ブルーノの指示で従僕がパラパラと出てきて、王都から連れてきた使用人や騎士達の対応を始めた。

俺の一步下がった位置に側近達がスツと立つと、ブルーノはどこか驚いた顔をし、次いで誇らしげな目を向けてくる。

玄関ホールに入ると、そこにずらりと並んだ使用人一同から「お帰りなさいませ」と一斉に挨拶を受けた。

メイド長の姿もある。彼女も懐かしいな。ブルーノみたいに目が赤くなっている。

「久しぶりに話をしたい者ばかりだ」

「是非、お声をかけてやってくださいませ。わたくしども皆、閣下のお帰りを待ち侘びておりましてから」

「もちろんだ。おまえともゆっくり話したいな、ブルーノ」

「そのように仰つていただき、この上なき喜びに存じます」

ニコラとラウルには客室を側近用の部屋として提供し、案内はメイド達に任せ、俺はブルーノに案内してもらう。

俺の部屋は以前暮らしていた部屋ではない。当主のための部屋だ。

フェランドがずっと住んでいた部屋なんて嫌だなと初めは思ったが、考えてみたらその前はお祖父様の部屋だった。

あの野郎じゃなくお祖父様の部屋。そう思うと格段に気が楽になり、「さつさと家具その他を運び出し内装も変えてしまえ」と指示を出しておいた。

懐かしい階段を上がり、懐かしい廊下を歩く。

俺はだいぶ背が伸びたのに、まだブルーノのほうが高いのがちよっぴり悔しいな。

「こちらでございます」

ブルーノはドアを開け、俺が入りやすいようにサツと脇に移動してくれた。

当主らしく豪華でいて、気品と機能美を両立させた家具が目に入る。

絨毯じゅうたんもカーテンもクッションも、色同士が喧嘩することなく、すっきり整った配色だ。

うん、さすがブルーノ。細かい部分は任せていたのに、俺好みの部屋に仕上がっている。

運び込まれた革張りのトランクが一箇所に寄せられているけれど、あれは荷ほどきの際に俺のチェックも必要なやつだな。

その横には子猫のケージと、猫用ベッド。

「まあ、素敵なお部屋ねえ」

「おへや、ひろーい！」

イレーネとシルヴィアも、段違いに広くなった俺の部屋を眺めて感心していた。特にイレーネは昔の俺が住んでいた趣味の悪い部屋を知っているし、余計に感慨深いだろう。

そんなイレーネの部屋は今までと同じ、すぐ隣にある当主の妻のための部屋だ。

もし俺自身が妻を迎えるなら不都合が出てくるけれど、そんな予定はないしな。

こっそり照れつつ、近くに立つアレッシオを見上げた。

「……？」

あれ？ どうしたんだろう。

てつきり穏やかに微笑んでいると思ったのに、表情がこわばっている。

「アレッシオ？ どうし……」

言い切る前に、言葉をごきゅりと呑み込んだ。

どうしたんだろう、じゃないよ俺。

なんでそれを今の今まで考えなかったのか、自分に突っ込みたい。

さつきからなんか静かだなーと思っていただけ、そのはずだ。

——アレッシオのお父さんがいるんじゃない！

今までずっと手紙や報告でしか聞いていなかったブルーノが、目の前に。

なんか俺の中で、ブルーノ親子は二人とも『執事』っていう究極の存在に分類されてて、本気でこの点を失念していたんだよ！

「アレッシオ、おまえの部屋はこちらだ」

あ、普通の親子の会話だ。息子が貴族になっても今まで通りなんだね。

むしろここでブルーノがアレッシオに敬語を使い始めたら、もしかして気温が下がる合図なのだろうか。

ところでアレッシオの部屋はどこなんだろう？

ブルーノの背を追うと……

「……え？」

「あら、アレッシオも隣なのね」

のほほんとイレーネの声。

そう。アレッシオの部屋は、イレーネとは反対側の、俺の部屋の隣だった。

この部屋、本当なら後継者が住むための部屋だよ。小さい頃は子供部屋に住み、正式に跡継ぎと認められたらこっちに移る、みたいな部屋だった気がするんだけど。

ここ、アレッシオが住むの？

で、手配したのがブルーノ？

「……………」

アレッシオが無言で固まっている！

俺のお継母かあさんはニコニコしている！

アレッシオのお父さんはニッコリしている！

「どうした、確認せんのか」

お父さんが息子を追い詰めております！

アレッシオが洗面せんめんに！

オルフェオ選手、役に立ちません！ なんでコイツはここにいるんでしょう！ 実況オルフェオ

解説不在でお送りいたしました！

それはそうと、この親子が会話しているところを見るのは初めてだ。アレッシオってお父さんにはこんな顔するんだな、へえ……とか感動している場合ではない。

アレッシオが無言のまま部屋に入り、どうしようと逡巡しゅんじゆんしていると、ブルーノに「閣下もどう

ぞ」と促された。

あ、俺も入っていいの？ お、お邪魔します。

「この部屋に何か不足のものがございましたら、ぜひ愚息めにお言いつけください」
って、なぜ息子ではなく俺相手に言うんだブルーノ……!?

「晩餐の準備が調いましたらお呼びいたしますので、それまではごゆるりとお過ごしくださいますませ」

ブルーノは完璧執事の笑顔を残して退室。イレエネは「またあとでね」と微笑んで、シルヴィアの部屋を見に行ってしまった。

専属メイドのエルメリンダとミラは、今ここにはいない。初めて本邸に来るミラと一緒に、この使用人に挨拶がてら思い出話でも楽しんでるのだろう。

しばらくアレッシオと一緒にいるからそうしなさいと言っておいたのだ。俺が。

……なんということでしょう。もしかこれは、もしかせずとも、お膳立てされちゃったみたいない感じではありませんか？

「アレッシオ。おまえの父は、その……知っているのか？」

「……私から話してはおりません。仮にどなたかが耳に入れたとしても、噂や推測だけで行動はしませんから……おそらく、私の行動といえますか、そういうもので察したのでしょうか」

アレッシオがものすごく複雑そうな顔をしている。

そりゃあ、尊敬するお父さんにいろいろ察知され、しかもこの部屋を用意してしまったのだ。

息子としてはそんな顔になるしかなかるう。

頭から反対されなかっただけ、よかったと思えば……なのかな？

親に打ち明ける前に、全部見透かされていた息子の気まずさを二人して抱えつつ、ひとまず荷物を片付けようということになった。

「専属でつけてほしい使用人はいるか？」

「私は現時点で不要です。ニコラ様とラウル様も、必要になればその時にお問い合わせすると思えますよ」

「わかった。では、あとでな」

俺はこれから住む自分の部屋に戻り、ドアを閉じるなり頭をガシガシと掻いた。

アレッシオはブルーノの前で気まずそうにしていたけれど、俺だって気まずいよ。

だって、過去の行状を振り返ってみる。あなたの息子さんに媚薬を盛って襲わせようとはしましたなんて言えないじゃん？

「まあ、変態認定されるわな」

ケージから出した途端、子猫が俺のつま先にじゃれつきながら発した言葉の槍は、俺の心の繊細なところにドスリと突き刺さった。

——その通りだ子猫よ。危険物扱いされること間違いなしだよ。

あのブルーノからゴミを見るような目で見下されるなんて耐えられない……!

若気の至りに時間差攻撃を食らっておりますオルフェオ選手、なんて脳内遊びはほどほどにして、ちゃんと更生しているところを見せねば。

とはいえ、持ってきた荷物はそんなに多くない。家具や衣類の多くは基本的にこちらで用意されているので、トランクの中身はほとんどが俺の事務用品だ。

軽くチェックしているうちに、エルメリンダとミラが挨拶回りを終えてきた。

「もういいのか？」

「挨拶だけですから、そんなに時間はかかりませんよ」

「皆様とてもあたたかいばかりで、嬉しゅうございました」

「それならいいが」

俺は残りの荷物の配置を二人に任せ、風呂に入ることにした。

もう十六歳だけれど、昔より偉くなつたから、誰もいない時にひとり勝手に風呂に入つたらいけないんだよ。転んだり湯船で気絶したりした場合、気付いてもらうのが遅れるからね。

旅の汚れを落とすついでに、煩惱も落とせたいいな。そんな儂い希望を胸に、衝立の中で服を脱ぎ、風呂で温まって汚れを落とす。

残念ながら変態菌はしつこくて落とせなかった。でも、気分はとてもさっぱりしたよ。

浴室から出ると脱いだ服は消えており、その代わり籠の中にバスタオルが用意されている。

軽くぬぐうだけで水分を吸収してくれるタオルは、もはや日々のバスタイムに欠かせない必需品だ。

「つくづくこれを作つて正解だった。快適さが段違いだ」

衝立の内側に衣装台が置かれ、本日の晚餐用の正装が並べられていた。

大人になつても下着の着替えまですべてを使用者にやらせる強者もいるが、俺は日頃から「自力で着られない服は嫌だ」と主張している。特別な衣装の時は手を借りても、こんな歳になつてまで妙齢の女性に手伝わせたくはない。

一通り着込んだら、シワが寄っていないか、糸が出ていないかを専属メイド二人にチェックしてもらおう。

必要ならクラバットを巻き直し、髪の手入れをしてもらつて出来上がり。

エルメリンダとミラは俺の入浴中に、荷物があるべき場所に配置してくれていた。

もし本邸の者に任せていたら、置き場所が不明で困らせたことだろう。蜂蜜の小瓶なんて、普通ならソファに囲まれたローテーブルの上か、その近くの棚にでも置きそうなものなのに、俺はいつも書き物用の机の上に置いているし。

最後に、子猫用ベッドの場所だ。

「これはどこに置いてもらいたい？」

「ん〜、あそこがいいな」

ソファの上ね。了解。

子猫と会話をする主人に、メイド達の視線はぬくもりに満ちている。

服に毛が付く心配がないので心置きなくじゃれていたら、従僕が俺を呼びにきた。

今夜は本邸初日の夜だから正式なディナーだ。子猫の食事をエルメリンダとミラに任せて廊下に出ると、側近達が三人ともそこに揃っている。

さすがはみんな元攻略対象、正装だと迫力が倍増だ。

それにつけてもアレッシオの正装姿の素晴らしさよ……スクリーンショット機能の実装はいつでもか？

やはり俺の煩惱は風呂ぐらいでは落とせなかったようだ。

男性陣が食堂に集まり、ややして女性二人が登場。イレエネはもちろん美しいし、シルヴィアも可愛い。

今回は貴族の客人として、側近の三人にも座ってもらおう。新しい本邸料理長による心尽くしのディナーが運ばれ、見た目はもちろん食感や味も最高だった。

「やはりおまえのパイは美味い」

俺は新料理長を褒めた。

「本当ですこと。表面はさつくりしているのに、中はやわらかくて」

「シシイもこのパイすきです！ まえのはどうしてもグシャってなって切れなかったの」

——新しい本邸料理長は、王都で料理長をしていた男だ。

俺達一家に褒められ、彼だけでなく一緒に連れてきた料理人達も皆、ニコニコと嬉しそうにしている。

一方、旧料理長とその子分達は青ざめ、中には新料理長を憎々しげに睨みつける者もいた。

そう。この場には新旧の料理人、全員を呼んでいる。

「シシイは以前ここで出ていた料理、食べにくかったのか？」

「かたいつていうと、『こういうおりょうりなんですよ』って言われました。うばやがもうちょっとやわらかくしてつておねがいするんだけど、兄さまたちはちゃんとおたべになってましたよつて……」

「そうか」

「いえ、あの、坊ちやま。おそろくお嬢様は、お記憶違いをなさっているんだと思います。決してそのようなことは……」

「黙れ。閣下と妹君がお話し中だ。誰がきさまに発言を許した」

手もみをしながらヘラヘラ割り込んできた旧料理長に、厳しい声を発したのはジェレミアだ。

迫力たつぶりの騎士隊長にすごまれ、旧料理長は「ヒツ」と後退り、子分達もますます顔色が悪くした。

強そうな相手には途端に弱腰になるんだよな、こいつら。

「ブルーノさん。閣下が現在、どのようなお立場でいらっしゃるのか、こちらの方々には伝わっていないのでしょうか」

ニコラが最近習得しつつある冷徹モードを披露した。なかなか堂に入っている。

「いいえ、ヴェルデ様。ロッソ邸の使用人すべて、閣下のお立場についてはしっかりと学ばせております」

にこやかに答えるブルーノもさすがだ。

旧料理長は自分の発言に嫌味を含めることが多いだけあって、人の言葉の含みにもすぐ気付いたみたいだな。口の端をひくひくさせている。

『知らぬ者はロッソの使用人ではない』
つまりそういうことだ。

小さい子に嫌がらせをしてほくそ笑む、相変わらずの性根が気に入らない。皆が俺を『若』と呼び始めてからも、こいつは坊ちゃま呼びを継続し、未だそれが許されると甘く見ていた点もな。

俺は金輪際、こいつやこいつの子分が作った料理なんぞ、二度と口をつけるものか。

「あのっ、お待ちをっ！ ぼっちゃ、いえ、閣下！」

従僕がわらわらと集まり、この場に相応しからぬ者を一人残らず食堂から引きずり出していった。俺は奴らとただの一度も視線を合わせず、ひとことも口をきかなかった。

誰よりも優雅に、美しく、気品に満ちていると称賛される角度で微笑み——俺はただ、目の前の美味しい料理を堪能すればいい。それこそが奴らのダメージになる。

イレネが「ふふ」とスツキリした笑みを浮かべた。
「ジルに楽しい報告ができそうだよ」

喜んでもらえてよかった。

シルヴィアは俺の作法を見て、必死で真似ようと頑張っている。可愛いな。

あー、メシがうま。

素晴らしい晚餐を終え、俺は最高の気分で部屋に戻った。

部屋の前で見張りの騎士が一礼し、扉を開けてくれる。

俺に続いてアレッシオも入室し、それと同時にエルメンダとミラはさりげなく姿を消した。

着々と環境が整っている……何のとは言わないが。

「ご入浴は？」

「一度入ったし、食べたばかりだ。今夜はもういい」

やや行儀悪くボスンとソファに腰を落とし、子猫の頭をなでなで。

食堂での出来事を読み取ったか、子猫の瞳が愉快そうにキラキラしていた。こういう土産話、これからまだ聞かせてやる機会があると思うから、是非楽しみにしておいてくれ。

食後の妹の様子を思い出し、頬がゆるむ。美味しいものを食べてお腹がいっぱいになると、どうしても眠くなってしまふんだよな。

今夜は頑張ってる起きて、俺達との会話を長く楽しむんだと気合を入れていたのに、やっぱり瞼が落ちかけていた。

「ご立派でした。明日の朝にはラウル様が正確な噂を流す予定です。もっとも、こちらの使用人が自主的に広めてくれそうですが」

あいつら、被害者ぶって「極悪非道の新領主に追い出されたんだ！」とか言いふらしそうだから

な。そうはいくかつての。

「どうせ何もできやしないと見下して、さんざん舐めた真似をしてきた子供が、自分達を排除できる力を得て戻ってくる……ここしばらく生きてきた心地がしなかつたらうよ。今からどうやって媚びを売ろうか、必死に頭を絞っていたようだが、無駄な努力だったな」

本来なら放置していても自滅で消える予定の奴らだったが、フェランドがああなった以上、しばらく居座るかもしれないなかつた。

あんなのにいつまでもでかいツラをさせておく気はなかつたので、今回しつかり退場してもらうことにしたわけだ。

「格好よかつたですよ」

「そうか？」

「ええ、とても」

格好いいのはおまえだろう。そう返しかけたら、何故かアレッシオが目を逸らし、ゆっくりとソファの後ろに回り込んだ。

「アレッシオ？ どう……」

言葉が途切れた。背後から伸びた大きな手が、俺の頬や顎に優しく触れてくる。

壊れ物を扱うようなその手つきは、いつもの顔の手入れとも違っていた。

彼の指がスルリと唇を撫でた瞬間、俺の背筋にビリツと電流が走る。

「ン……」

うわっ、変な声が出ちまつた！

——ていうか、あ、アレッシオ!? 何やってんの!?

どくどく暴れ出した胸を手で押さえたのに、全身が硬直して動けない。唇をサワサワ撫でられ、止めようもなく不規則な呼吸が漏れてしまう。

さらに彼は身をかがめ、俺の耳に低い美声を送り込んできた。

「あなたに見惚れて、触れたくなくて、困りました……」

つつうあああゝっ!?

み、耳が、脳がやばいっつ!

後戻りできない崖がすぐそこに見える。なのにアレッシオは、容赦なく背中を押してきた。

「その日が来たら、覚悟しておいてくださいね。割増していただきますから……きつちりと」

割増しって——割増し？

……確か延期をお願いした時、その分はきつちり取り立てますからねという、そういうばそんな約束もしていたのだった。

俺、「任せろ」とか返事しちゃった気がするぞ。やばくない……??

身体が震え始め、ぎゅつと瞼を閉じる。

すると前触れもなく彼の手が離れ、背中に感じていた気配も離れた。

「え……?」

「のちほど手入れに参ります。お着替えがお済みになりましたら、このあたりに置いてお休みに

なつてください。私は少々、頭を冷やしてきます」

硬直が解け、おそろおそろ見上げた場所にアレッシオの顔は既になく、彼は背を向けて部屋を出ていくところだった。

呆気なくドアが閉じる。

俺はその後もしばし、呆然とドアを見つめてしまった。

「今のは、なんだったんだ……？」

無意識に子猫を撫でた。

俺の頭はその手のことに関する想像力が貧相すぎて、すぐに限界にぶち当たる。

『俺』はゲームによつてはモザイク入りのスチルだつて見たはずなのに、モザイクの記憶しかなくて結局よくわからんぞ、なんてこった。

《天使と愛の輪舞を》以外のゲーム知識は、どれも記憶が曖昧だからなあ。

なでなでなでなでなで……つぶらなアイスブルーの瞳が、きゅるんと俺を見上げている。

——はうあぁッ!?

「僕はただの子猫だにゃん。なんにも見てないにゃん」

嘘こけ!!

はっ、もしやおまえ予知能力でもあんのか!?

ここにおまえのベッドを置けつて言ったのは、最初からこれを狙つて……!?

「んなモンないつての。僕のベッドの横におまえらが来て、勝手にむちゅむちゅ始めただけ

じゃん」

む、むちゅむちゅなんてしてないもん!

……なんか俺、こんなんばかりだな。もうちよつと落ち着きのある大人になろうよ。

これでも巻き戻り前はプロのお姉さんと遊んでたんだけとか、ちゃんちゃら可笑しいわ、は

は……

仕方ないじゃないか。男同士は経験ないんだよ。

部屋置きの水差しからグラスに中身をそそぎ、一気に飲み干して無理やり頭をすつきりさせると、ソファの肘掛けの上を用意されていた寝間着に着替えた。

脱いだ服を適当にソファにかけ、寝室に入つてベッドの中にもぐり込み、頭まで毛布を被る。

しばらく目を閉じていると、アレッシオが来たようだ。

シワにならないよう、衣類を丁寧に整える気配がする。

それからまたボタンとドアの閉じる音がして、静かになった。

おやすみのキスはなしか……そりゃそうか。

安堵と残念な気持ちで揺れる天秤の幻を見ながら、頭を枕に埋めた。

眠気はなかなか訪れてくれなかった。

昨夜の出来事に脳内をホワホワと占拠される暇もなく、仕事は容赦なく押し寄せる。自棄になったあの蜘蛛野郎が何もかもを投げ出して以来、ずっと放置されていたあれこれがリストの形になって、俺の意識を奪いにかかってきた。

ほんとコレをどうにかしなきゃ、アレッシオと呑気にむちゅむちゅしてられんわ。

あいつと一緒にいる時に、手つかずの仕事が視界の片隅で常にチラチラする日々なんて冗談じゃない。

怖い怖いとビビっていたけれど、腹を決めた。

その日が来たらもう、容赦なくガツンとやってもらおう。

あれもこれも全部きれいさっぱり片付けて、心置きなくモザイクの向こう側の世界にダイブしてやる。

そのために俺はすべてをやり切って、全力で生き抜いてやる……！

「閣下、大丈夫ですか？ 目が据わって……いえ、すみません。愚問でした」

その日から子猫のリミットまでたった半年ぐらいしかないけれど、アレッシオの心残りを微塵も残さない勢いで、とことん俺を好きにしてみらおう。

まずは体力づくりだな。簡単に昇天しないよう、長持ちする身体づくりを……いや、俺の行き先は天じゃないか。

ん？ ラウルくん、さっき何か言った？

ああ気のせい？ ごめんね。

つか誰だこの書類作りやがった奴！ 領主の側近が算数もできねえのか！

厨房のお掃除が済んだあとは、執務室のお掃除だ。

フェランドの部下はイエスマンか、もしくはそれを装いながらいい目を見ようとする二枚舌ばかりだった。

俺はその全員之首を切り、前々から目星をつけていた者に替えた。

能力で選びはしたが、中にはプライドの高い者もいた。直接会うのは初めてだから、聞いた話や書類だけではわからなかった部分も出てくる。

「私がおまえのあるじに相応しいかどうかなど、それを自分が試せる立場にいても思っているのか？ 己を何様だと勘違いしているのだ。くだらん自惚れのために、人の時間を無駄に使わせようとする阿呆は要らん」

そーゆー構ってちゃんがいてムカついたから、鼻っ柱をポッキリへし折ってやったよ。

なんで俺がおまえに認められるただけに、時間や脳内のスペースを特別に割いてやると思ったのかね。

こっちゃん忙しいし、真面目に働いてくれる部下もいっぱいいるんだよ。仕事する気がねえんなら、どっか行きやがれ。

はつきりそうやってやったら、構ってちゃんは腹を立てて辞めるかと思いきや、俺を見返してやると鼻息荒く宣言して辞めなかった。めんどくせえ奴だな。

そいつはニコラの下に配置した。世の中、自分より優秀な奴がいるんだなと悟るがいい。そんなことより、当主でなければ触れてはいけなかった極秘資料を仕舞い込んだ部屋も、とうとうすべてが俺に開放された。

そして些細な違和感にも発揮されるニコラの記憶力が爆発し、怪しい資料だけじゃなく、奥にあった隠し部屋まで見つけてしまった。

資料棚の裏の壁に出入り口が隠されていて、広めのウォークインクローゼットに似ている。そこは後継者に伝えるためである超・極秘資料でギッシリだった。

「すごい。こんなに詳細な記録を残していたんですね」

「ここまで細かく記しているところなど、ほかの領にはないでしょうね」

ラウルとアレッシオが感心しながら、どんどん明るい場所に運び出す。

俺とニコラはそれらをテーブルに広げて目を通し、瞬きを忘れる勢いで見入っていた。

過去の大嵐の際に、ロッソ領内のどこで、いつ、何が起こったのか。たとえば水の溢れた地域があれば、具体的な範囲や水の引いた日付など、外にはまったく出ていない克明な記録の山に舌を巻く。

ひいお祖父様やお祖父様は、これらをもとに綿密な計画を立て、とんでもない予算と年月をかけて進めてきたというのに……遊び感覚のバカがたった十数年で破壊したのかと思うと、今からでもそのバカのケツに火をつけに行きたくなる。

ともかくこれのおかげで、格段にやりやすくなった。

安全地帯の割り出しができるから、今まで商会が建ててきた避難所の場所と照らし合わせ、そこが適切であるかも確認できる。

その日は全員で執務室に籠もり、うっかり昼食を抜いてしまった。

夜になると夕食を各自の部屋に運んでもらい、腹を満たして風呂に入って、できるだけ疲労を取る。

明日もまだ作業が続くのだから。

「アレッシオ……」

「だから、寝てくださいって」

おやすみのキスはもらった。いつもの安全なやつをな。

でもな、俺はもうそれだけじゃ足りないんだよ。

叶うならフエランドの腰巾着だった奴らをまとめて柱に縛りつけ、そいつらの足元に計算の合わない書類を積んでキャンプファイヤーをしてやりたいのも我慢したんだ。

脳髓がしびれるぐらいのやつをもらって、頭ぶっ飛ばさないと眠れる気がしないんだよ。

だから、口と口をくっつけたって、別にいいと思うんだ……！

「わかりました、わかりましたから。少し待ってください」

アレッシオは毛布を持ってきて、俺の身体をぐるぐる巻いた。何故だ。

「こうしておかないと、途中で脱がします」

了解です。危険なんですね！

さらに彼は不格好なロール毛布になった俺をベッドに寝かせ、上から包み込み、ぎゅつと抱きしめてくれた。

うあ……嬉しい。気持ちいい。

大きな手があやすように腕を、腰を撫でてくれる。

毛布越しだから感触がわかりにくいけれど、ロール状態になっていなかったら、きっと本当に脱がされていたんだろうな。

それから、顔中にキスを落としてくれた。

やっぱり唇だけは避けつつも、決しておざなりな触れ方はしない。ちゃんと愛情を込めていると感じる口づけだ。

覆いかぶさる彼の重みも、ぬくもりも最高に心地よくて、うっとり臉を閉じる。

鼻にかかった甘え声が出てしまっているのに全然恥ずかしさを覚えないのは、その頃にはもう意識が半分ぐらい飛んでいからだろう。

ふわりと睡魔に攫さらわれる直前、アレッシオの声を聞いた気がした。

「もしや、これからこれが毎晩か……?」

朝起きたらロール毛布は解除されていて、目覚めはすつきり爽快だった。

館に関する執事業はブルーノが、俺の世話に関する部分は希望通りアレッシオが継続してくれるらしい。俺の起床時にいつも通り現れ、カーテンを開けながらそんな説明をするアレッシオの表情

は完璧執事のそれなんだが、目がどことなく遠かった。

ごめんよ、こんな面倒な主人で。

でも今夜も、昨夜のあれを頼むことになると思う。

頭の中がおまえ一色になって、おまえの香りや体温や重みなんかを全身で感じたら、もうその瞬間に不愉快なことが全部どっかへ飛んでいっちゃってさ。

ものすごく熟睡できた感があるし、寝覚めが本当に爽快なんだよ。

「閣下とアレッシオ様、今日も執務室に籠もりきりの予定ですか？ お昼は抜いちゃダメですかね」

「食べやすい軽食をお持ちしますので、必ずお食べになってください。アレッシオ様もですよ」

朝食を運んできてくれたエルメリンダとミラに、俺達はまとめて説教された。

当然のように食事は二人分、ぎりぎり二人で使える大きさのテーブルにセットされ、向かい合って座る。

今朝は生ハムとアスパラと卵のガレットかな。美味そう。

デザートはオレンジのくし切りだ。何も手を加えず、そのまま美味しい。

「わかった、すまん。今後は注意する」

「その点については私も不覚でした。反省しきりです」

いつもなら絶対にそういうところに気付くアレッシオでさえ、メシ抜きで没頭してたもんな。

これまで不可侵の領域だった執務室や資料保管室は、この領地に関する情報の宝庫だった。その

宝の山をフェランドと奴の側近どもはろくに活用していた様子がなく、見つかるのはこまごまとした不正の証拠ばかりときている。

悪質な奴はクビで済ませずに捕縛命令を出したぞ、もちろん。

自分達のボスが王都から戻ってこなくなり、押さえつける奴がいらないから開放的な気分になって、徐々に勝手なことを始めたパターンがほとんど。

もし巻き戻り前の俺が、何かのきっかけで覚醒して領地に目を向けるようになっていたとしても、いずれ機能不全に陥るのは避けられなかったんじゃないか。

とにかく、やらなきゃいけないこともやれることも多すぎて、みんながどっぶり集中していたら、いつの間にか日が暮れていたのだ。

肝心な時に倒れて使い物にならないと本末転倒だから、メイド達の忠告に素直に反省しつつ、今日も再び執務室に籠もる。

豊かで問題の少ない領地だったのが、こういう時はありがたい。毎日何かしらトラブルが発生する中で調査を続けるとなると、今の比ではない時間と労力が必要になっただろう。

俺やジルベルトは完全にノータッチだった宝石関連の産業についても、やっと触れられるようになった。王国内でもここにしか出ない宝石があり、採掘場の周辺は加工業に優れた町が発展して、その近辺からの収入がとてつもない額になっていた。

そちらは新しい担当者に任せている。前の担当者は一部をこっそり懐に入れていたから、牢屋行きになった。

そして夜。

「アレッショ」

疲れたんだよー。もうぐったりなんだよー。癒やしが欲しいんだよー。

演技じゃないぞ？ おまえ相手に演技できる余裕なんて、俺に残っているわけないだろうが。

「はいはい……」

彼はあきらめの溜め息をつき、俺を毛布でコーティングして準備完了。

毎度のことながら俺、格好悪いわ。

でもつまりは、こうしなければいけないぐらい俺を欲しがってくれている証拠なわけで、嬉しいと感じてしまうのが申し訳ない。

「すまん。どうか愛想を尽かさないでくれ」

「尽きると思われるのは心外ですね」

抱きしめられ、目尻に唇を落とされて、頭がくらくらする。まるで酔っ払いだ。

俺もう、これがないと生きていけないんじゃないの……？



フェランドと奴の部下は、目の前の仕事だけをテンプレート通りに片付けるか、人に命じて片付けさせるということを十数年も続けていたようだ。